日本オラクル

必要な情報をリアルタイムに提供する 「Oracle Business Intelligence 10g」

Oracle Fusion Middleware 上で 実現される次世代 BI

Oracle Fusion Middlewareとは、 グリッド・テクノロジーと業務アプリケーションを1つに融合させるオラクルのソフトウェア製品群を指す。 SOAに準拠した標準かつオープンな技術を用いることで、「ビジネスの変化への俊敏な対応」、「意思決定のリアルタイム化」、「セキュリティ」という3つの課題を解決できる。

図 1 は、オラクルが提供する情報 システムアーキテクチャを体系化し た「Oracle Information Architecture」 を表したもので、その中間に位置して いるのがOracle Fusion Middlewareで ある。Oracle 10gが提供するグリッド・コンピューティングのテクノロジーを完全に活用し、その上で業務アプリケーションの実行に必要な全ての機能とソリューションを提供する。このOracle Fusion Middlewareが軸となり実現できるソリューションに、ビジネス・インテリジェンス(BI、データの可視化)が含まれている。

日々発生するトランザクション・データは、データベースに格納され、管理される。このトランザクション・データを分析し、企業戦略に役立てることがビジネス・インテリジェンス(BI)のミッションである。現在のBIは、単に前日のデータを見ることができれば良いというレポー

ト中心のものから、必要な時に必要な情報を分析するリアルタイム性が求められている。オラクルが目指している BIは、 Oracle Fusion Middleware上で実現されるデータの可視化を必要な時に的確に行うための次世代BI、「リアルタイム・ビジネス・インテリジェンス」である。

分析ツールは氷山の一角に過ぎない

BIは、7、8年ほど前に起こった第1次データウェアハウス・ブームの影響を受け、各社がこぞって分析システムを導入し始めたことが注目を集めるきっかけとなった。当時のユーザーおよび開発者が、最も関心を寄せていたものがユーザー・インタフェース、いわゆる分析ツールである。

BIでは、パフォーマンス・ダッシュボードや問題点の可視化、多彩なグラフ表示など、見た目に華やかな部分に目がいきやすく、ツールの選定もそこに重点を置きがちである。しかし、BIシステムにおける分析ツールは、氷山の一角に過ぎない。見た目の美しさや分かりやすさも大切だが、最終的にはデータの精度でそのシステムの価値が決定され

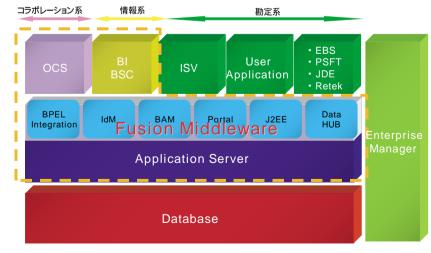


図1 Oracle Information Architecture

るのである。つまり、肝心なのは、 何のデータをどのタイミングで投入 し、どのように活用するのかという ことである。

完全に統合された 次世代 BI プラットフォーム

BIへのアプローチ方法は、大き く「伝統的なBIシステム」と「リ アルタイム・ビジネス・インテリジ ェンス」に分けられる。

そもそもBIシステムは、データウェアハウス、データマート、OLAP、アプリケーション・サーバー、Portalサーバーなど複数のカテゴリーに分けられる。これまでの伝統的なBIでは、各ベンダーが自社の得意なカテゴリーに特化したツールを提供し、ユーザーはニーズに合わせてシステムを導入していた。また、目的別のデータマートやOLAPを部門ごとに設置し、分析ツールもそれぞれ専用ツールを用意していた。その結果、継ぎはぎだらけのシステムとなってしまい、1.管理が

複雑になる、2. セキュリティが脆弱になる、3. ユーザーが複数のツールを使いこなせない、などの問題が生じていた。

一方、リアルタイム・ビジネス・ インテリジェンスにおけるリアルタ イムの定義とは、データを利用する 立場によって異なるものである。瞬 時に変化する最新データを常に必要 とすることもあれば、日次データを 軸に戦略が練られることもある。こ こで重要なのは、分析したい時に、 分析のための最新情報が備わってい るかどうかである。そして、データ の可視化が必要な人に必要な形で的 確に行われることである。そのため には、高速なデータベース上で、正 確なデータの整備、Webによる分析 情報の配信、企業情報ポータルによ る利用者個別の画面表示、ユーザー 認証によるセキュリティの実現、個 別アプリケーションとの連携を可能 にするミドルウェアが必要である。 Oracle Fusion Middlewareは、これ らの機能を統合し、その上で稼動す るOracle Business Intelligence機能 自身をも含んでいるのである(図2 参照)。オラクルは、伝統的なBIで はなし得なかったソリューションを、 統合ミドルウェアを活用することで 実現しているのである。

DWH **に最適化された データベースを設計・加工・管理**

オラクルでは、Oracle Database に最適化されたデータウェアハウス やデータマートなどを設計、加工、 管理するためのツールとして、 「Oracle Warehouse Builder」を提 供している。Oracle Warehouse Builderは、単なるETL (Extract, Transform, Load:抽出、变換、口 ード)ツールではなく、ETLプロ セス、ウェアハウス設計、エラー検 出、リカバリ機能も含んだ、システ ム全体の管理を容易にするためのツ ールである。情報は全てリポジトリ に一元的に管理されるため、メタデ ータの不整合に起因するコストが削 減できる。また、データウェアハウ スに格納したデータを自由に検索 し、分析・レポーティングするため のツールOracle Discovererはビジ ネス・ユーザーからパワーユーザー まであらゆるユーザー層の分析ニー ズに対応している。このように、 Oracle Business Intelligence 10g は次世代BIの実現をトータルにサ ポートしている。

・コストの劇的な低減 ・初期導入コスト、運用管理コストの低減 完全に統合された 容易な運用管理 プラットフォーム 堅牢なセキュリティ ・ソフトウエアライセンスの複雑さを解消 完全に統合されたOracle Business Intelligence 管理・開発 セキュリティ Portal統合 分析·帳票 Web展開 ETL ROLAP アプリケーション 最適化 BI 他ベンダーの提供する製品 されない -夕統合 情報活用 完全に分断されたBI

図2 完全に統合された Oracle Business Intelligence

お問い合せ先

Oracle Direct

TEL: 0120-155-096

URL: http://www.oracle.co.jp/direct